

特集

問題解決志向に 疲れたら……



1980年以降、看護は問題解決思考を基盤にした看護過程によって大きく発展を遂げてきました。問題解決能力の向上とは、迅速な判断、高度な専門性、強い思考力を求めるものです。確かに、科学の進展とは、こうした側面ももつでしょう。そして看護には、問題解決を優先する、問題解決志向と呼べる文化が醸成されてきました。

しかし、特に近年、精神科看護や慢性期看護など、疾患をかかえたまま生きていく患者を支える領域から、ネガティブケイパビリティ、ストレングスモデル、当事者研究など、問題解決だけではとらえきれないケアの諸相が描かれるようになっていきます。そうしたケアは、看護師などの医療者が、患者の問題を解決しようとする前提となる発想自体への深い問いかけが秘められています。

また、問題解決志向は、教育においては、学生の課題やできていない点に気がつきやすく、教育効果を性急に求め、学生を管理して導こうとする発想につながります。しかし、みなさまも、学生時代に成績が芳しくなかった学生が、卒後、臨床現場で活躍されている例もご存知ではないでしょうか。教育には、学校で花開かなくとも、そうした可能性の種を育む役割もあるはずです。

今後も、看護教育において、問題解決能力の育成は重要なテーマであり続けるでしょう。しかし問題解決志向が強くなりすぎると、みなさまも、学生も、患者もきっと疲れてしまうのではないのでしょうか。

本特集でご紹介する、問題解決志向ではないケア、また医療者のあり方が、今後のみなさんにとって何かのヒントとなれば幸いです。